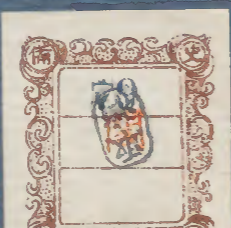


# 成形圖說

農事部

九

內閣文庫			
一九六函	三〇冊	二九四三八號	和書類



內閣文庫	
番號	和 29438
冊數	30 ( 9 )
函號	196 96



Kodak Gray Scale

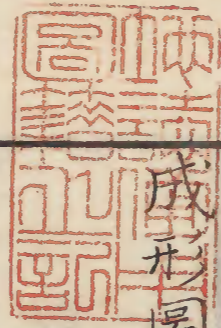
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



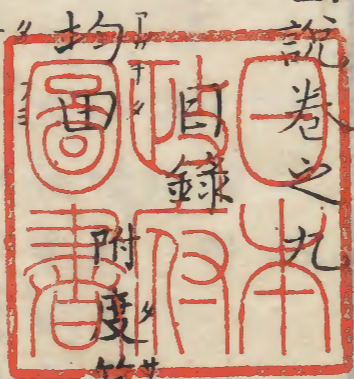
© Kodak, 2007 TM Kodak



函  
79



成形圖說



卷之九

役ヨホ丁

黄册

均リ

録リ

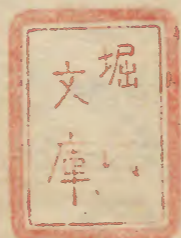
附リ

度リ

竿リ



丙一一一〇號



成形圖說卷之九

成形圖說卷之九

農事部均田

班

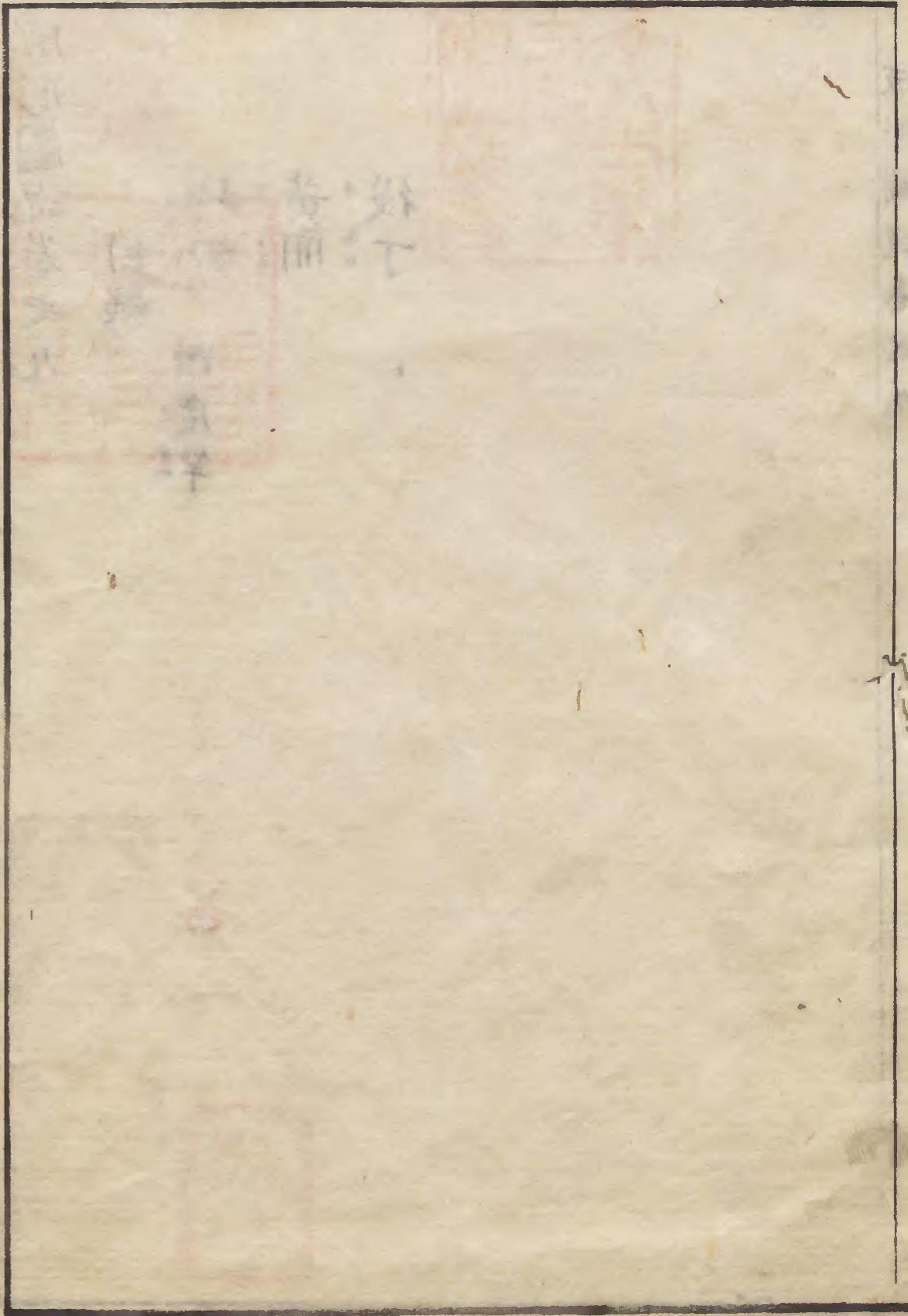
田書紀○續紀天平元年三月班口分田依令收授於事不  
便請悉收更班令義解班頌也田所以殖五穀之地也凡  
田六年一班萬葉集に班田使の事以六班一皮づ  
つ諸國の田地と改らるるに班田使の事以六班一皮づ  
校史に歷舉以後の事此使を考れしと國  
史に歷舉以後の事此使を考れしと國



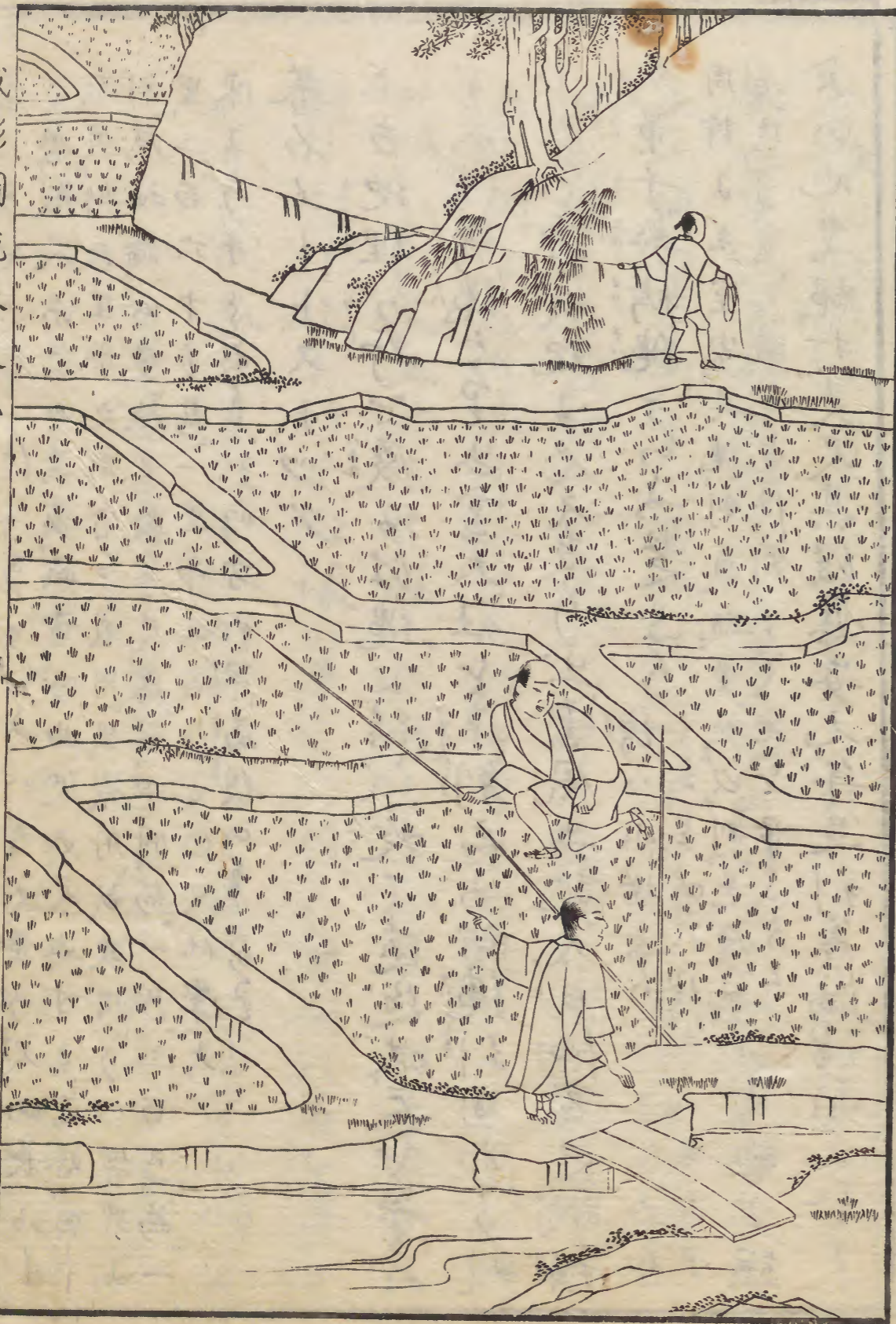
部割と孝德賦田班田皆多比多延喜式謂授田也  
地割と孝德賦田班田皆多比多延喜式謂授田也  
檢田入勘之事といへり毛檢地鑑東支配地と支給し  
視とと檢田といへり毛檢地鑑東支配地と支給し  
姓とと檢田といへり毛檢地鑑東支配地と支給し  
謂班田收授の古子  
竿入地押地取

成形圖說卷之九

二







四



方一弓と一歩と一弓と一歩とハ即ち量弓尺の長ハ一  
尺六寸也其長此方の曲尺五尺五寸と云々  
數度行云里歩之用有三或用里或用畝或用弓  
引度地論云量地之數二尺為肘四肘為一弓三  
里三百六十步為一里而三百弓也又仕學大  
乘弓手とあるハ此方の竿取役の事と云

蕃名メートストツツ

上古地理分野と度ハ繩と結び延て遠近丈尺と量れ

里不謂考繩とる出雲大社と草創と云時繩引用のれ

一と神代紀と云えり出雲風土記天日竊宮之蹤横

御量千尋考繩と云是より考ハ山楮あり今も太布

周詩ヨ立室家其繩則直疏量地以制邑度地以東鑑子鑑

倉の地曳繩打丈尺其後應安元年足利義滿諸國子令

て檢田城沙汰ヤ一六とある上代ハ六々の田割と云一  
町三十六坪の積より豐太閤の村五六の田割と改て  
三千坪と一町と云當時此五六ふて田の長六十間横ハ  
中の道より左者一廿間づ中は通路十間の割法にて  
五十間より五六十の積なり退私録ハ太閤の時  
此繩ハ六尺五寸也其後六尺繩と云是ハ福葉濃州の  
致されと云讀史飯瀆曰豐臣氏後在弊佐其害と云さ  
れハ武家の友位と云のにおに云く又宮室と飾  
ていのおみ莊嚴と云り其より天下の田と丈量  
るお古法と變て三百歩と一町と云古法ハ三百六十

歩を以て一町とせば一歩を以て一夫一日の食と  
 して一町一年の食分をえと云ふはかく約らして  
 いふ一乃王法と変られ一は万民争り窮乏しんさ  
 れば法再びおふ復んこと井田一とて復して復一難  
 がごとくちりぐり蓋そ氏丈量とせしるまじりの  
 一とて或一郡一町一荘と異人あつ六十餘町の地は是  
 ざ法をとおしかくハ計らるるまわらあり蓋氏曰天  
 正の前の水帳は一段三百歩とありは太閤より始るよ  
 飛渡らつり又民間ありハ或六尺二寸より三寸四寸  
 有崎等の差たり或曰又祿りの歩法六尺三寸一歩ハ

是畦と云く宛りあり或六尺五寸ハ畦越加て宛じ  
 是近來のよりあり田と人あよくと魚息ハ田の畦ハ家の  
 お居のどと文祿の歩法六尺三寸方ハ二帖の定尺  
 也是と家の間ハ積ハ六尺三寸ハ柱の中間毎ハあるそ  
 柱横ハ家の家ハ六寸角ハ家の家ハ八寸角あり家の長  
 是四角方のあり柱の幅ハ家者越入てそ曾ハ横三尺一  
 寸五分縦六尺三寸尺の長をなて廣くは狭くは合  
 る儀なり然らば小き畦とてありハ六尺五寸裕を  
 くあり大ききあり畦と加て打ふハきり好むとあるをきりあり  
 あり又檢竿の長ハ六尺五寸とあり六尺三寸とありと

て尺もバ是睦と除て究りけりるべし  
古事記傳曰凡家の柱と柱との中哉中間と云ハ記の所謂ハ箇間あり律原發揮曰以曲尺六尺五寸為一步俗稱一間筭路用之又以六尺三寸為一步俗稱京間每箇席二間置間一其間四寸折半之配一間則得二寸以減六尺五寸餘六尺三寸為席一間之法筭田積用之又以六尺為一步俗稱副間今按是後俗の從より瓊矛拾遺曰紫宸殿清涼殿等ハ七尺間也凡伸中指以十為一間臣下之屋作凡伸中指以九為一間故以六尺三寸為一間是古の制といつり  
 ○凡竿はてあがきき解交は繩引して地と量法と自繩又水繩管繩等の名何れ其繩約長一町或百間ふして一間のふし絢座十間の所は色籬の記跡とほくふなる但繩より畝段展びて縮りゆき竿とふき竿と打竿はうりよてを展び固く置竿と用う皆權道よりあきふこたなり

凡丈竿を二間ふして一丈二尺之と一間ふ一分づの  
 飯計とていへる百丈ふ丈といつどと寸歩と終らば  
量むよりあき敷百丈と竿取の巧拙よく敷服何ふとを流がそはけり少と私よく細査もろろなる俗は物の粗詰や一越皆違とらふハ田地の省敷と相違や一六といつり  
 ○竿と打は尺寸と去て某間まともなり云はば  
 十間五尺五寸とあはる付ハ十間まも定て零の二尺  
 五寸ハ去とあはる又十間まも横と二尺五寸づ五  
 尺と零とあはるハ一方ハ十間まもあはるておれ凡大  
 計るよ寸尺まで細く究むてハ反て穴費は坐て頼  
 しく伊急考徳紀にも半と五寸と訓まると五寸ふれバ





東限 岑山口 南限 堀越山谷 永為殖供御地黃地又元亨  
 西限 岑 北限 辛河合  
 二年四月廿日 田票津國小田村十條四里八坪の四至  
 他領限 西道限 北他領限 南濱  
 四方限 子宛めてハ後所居宅まで差缺をさす  
 今のごとく畝段打ふありと見えたり裁判至  
 要日弘仁二年二月三日 格田地占請之輩偏限四至不論  
 町段是以檢四至則涉于官舍人宅勘町段則不滿四至之  
 内求之政途理不合然自今以後占請地一定町段不依四  
 至云々

田

文 東鑑 ○拾芥鈔 田籍部あり 康曆元年式目 日吉  
 文 園北野 神輿可造 畢仰使節 召出國 大田文段別 三  
 閣 可檢納之 ○新田宮 藏弘安八年 薩摩國 田文事 神社佛  
 御圖帳 是本民部省 圖帳の畧言あり 故に御の字と附  
 水帳と云ふ省帳と云ふ御の字と附

名寄帳

高辻帳

檢地帳

圖田帳

黃冊

續文獻通考 明太祖洪武十四年 詔定編賦役黃冊之  
 制 先是天下戶口未定 籍至是始議編立黃冊 一輪  
 造其田地開豁各戶 若干有官民田地 二則係官田者 照依  
 官田則例起科 係民田者 照依民田則例 徵收 俱黃冊有載  
 賦額 適均而力 役 亦稽此以平矣 魚鱗冊 長暨耆民 躬履田畝 以量度之  
 遂圖其田之方圓大小 次書其主名 魚鱗圖冊 昭代典則  
 及田之四至 編彙為冊 號曰魚鱗冊 魚鱗圖冊 洪武廿年  
 浙江等府 縣集里甲 耆民 躬履田畝 以量度之 圖其田之方  
 圓 次其字 號悉書 主名 及田之丈尺 四至 編類為冊 其法甚  
 備 以圖所繪 狀若魚鱗 然故號魚鱗圖冊 清丈冊 丈冊 信編 砧基簿 文

靈臺儀象志  
測量圖

續抄卷集

定序

一とらふ

人

身

お

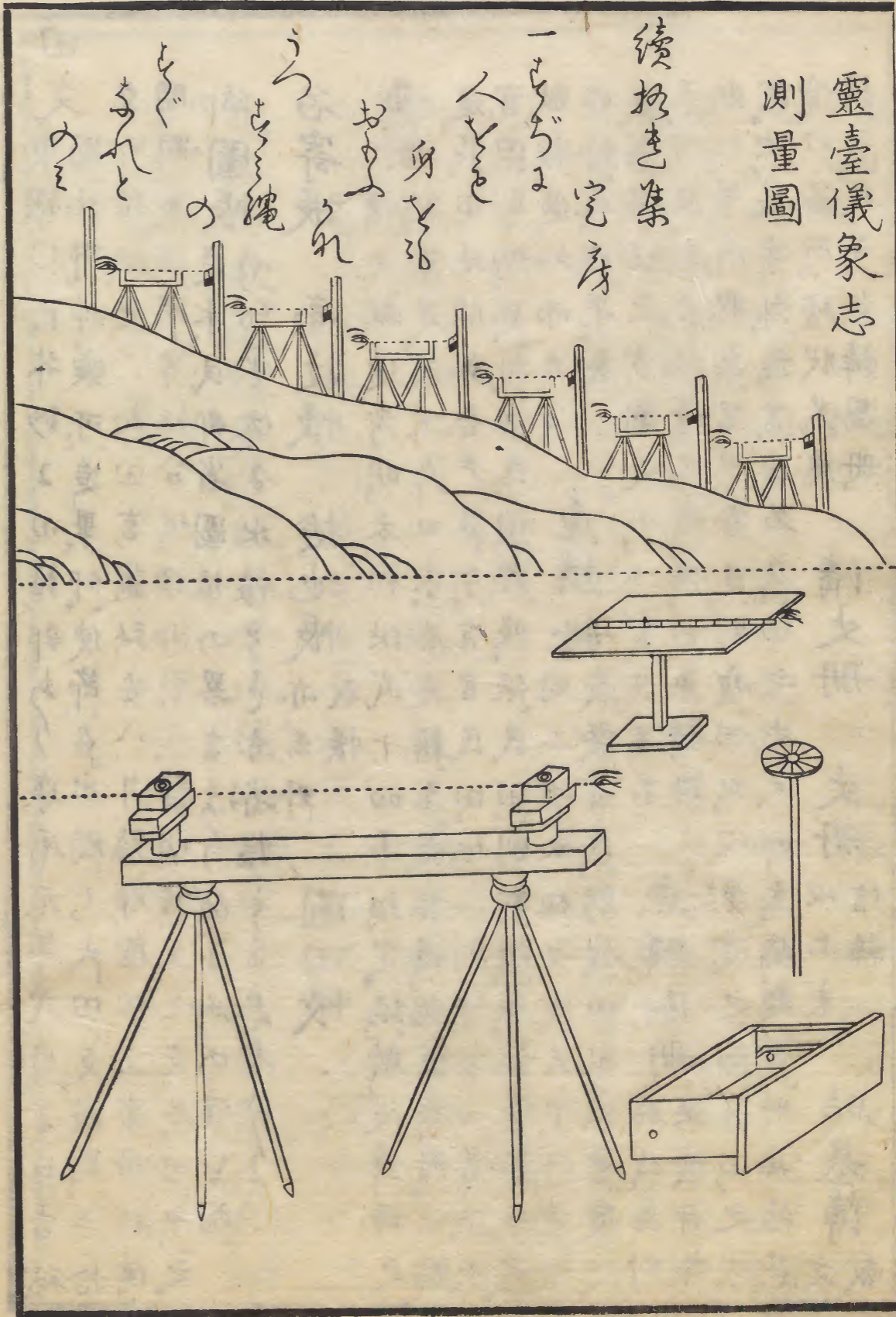
う

の

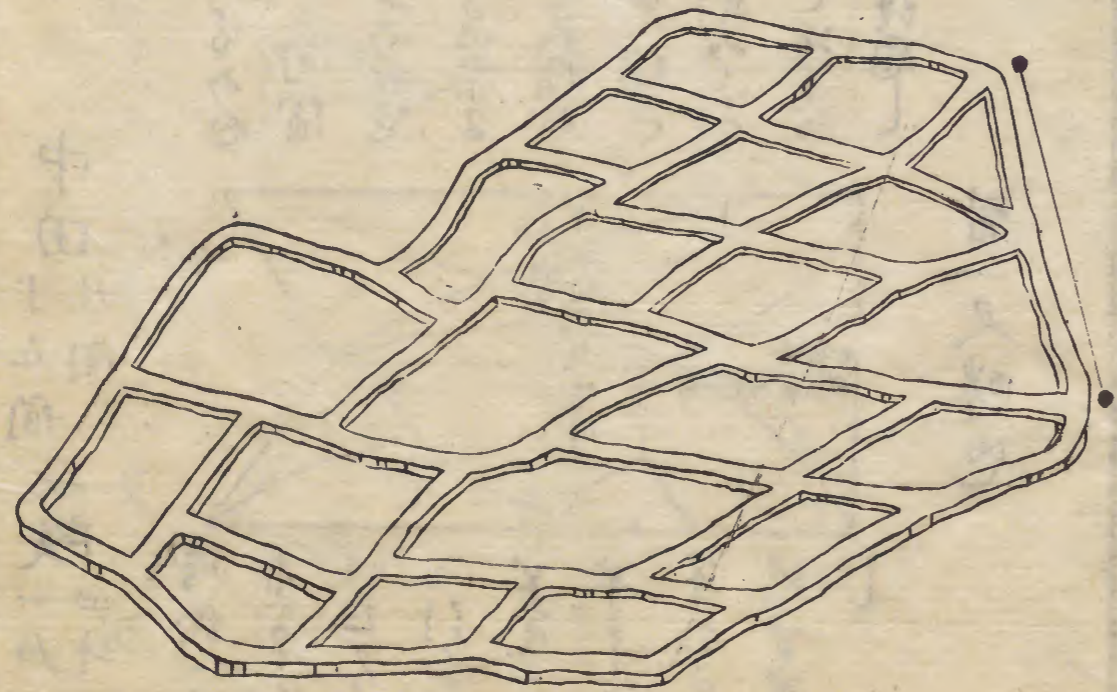
と

と

の

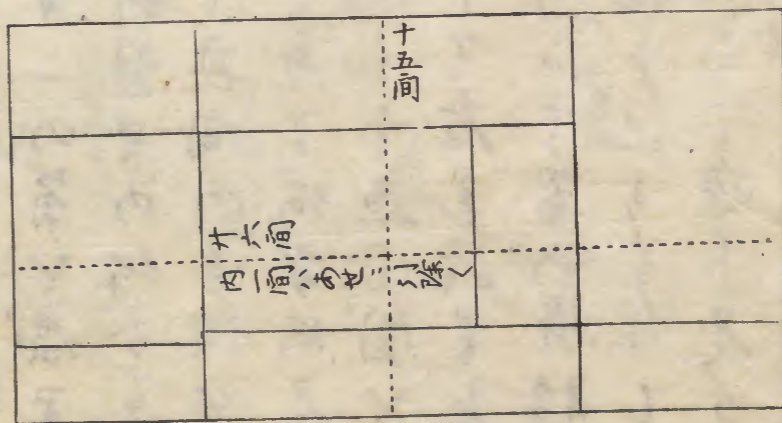


此景能令ハ黒圈初見の  
角の方子あはば羅針と  
備へ第二の角と度里を  
方向針盤の何分ある  
と記し其間の長短と林  
索めく度里何分何尺あ  
ると記し其間を度と皆  
かくして度里終り角と  
方向并みするの長短と  
記し後と記しよりて小  
圖と他とを準し尺とと  
きハ圈内何所行ぬるか  
あとと注し去るあり



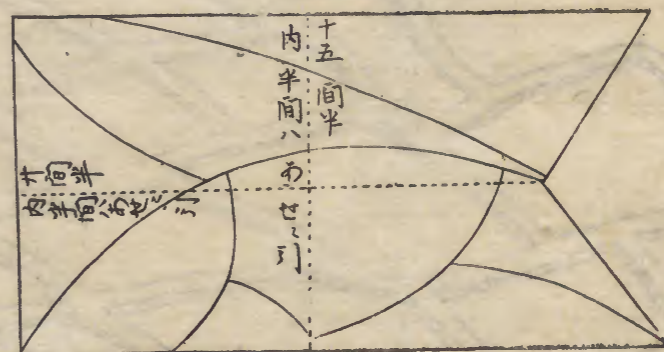
上田 十五間 一段二畝拾五歩二石

横一尺五寸  
 寸睦ニ具  
 お八寸の  
 小睦也每  
 圖は墨を  
 引ハあせ  
 朱と引ハ  
 竿の筋也



此家八階あせ  
 と終て間越  
 少後又あせと  
 引くは干よ  
 究る也又始あ  
 せと身入建き  
 間と究るる  
 竿とあせと  
 しと理同し

中田 十五間 一段一石四斗

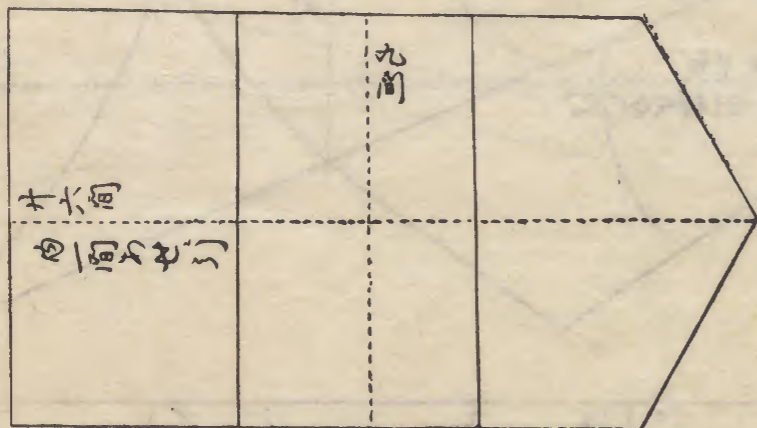


此地一方界  
 直くは段め  
 此なるま出  
 入引合せ間  
 と究るは矯  
 竿と竿の矯  
 竿のまあま  
 記寸がむと  
 し

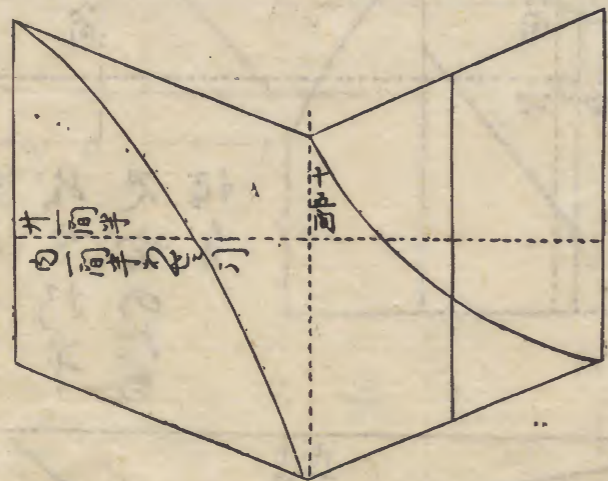
皆一尺睦也

下田 九間 七畝拾五歩九斗

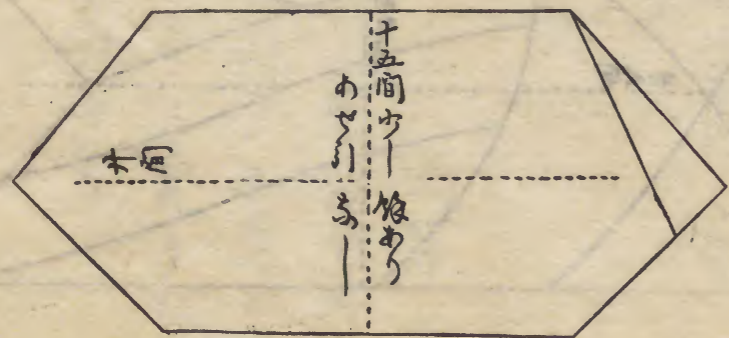
三尺高  
 あせ二  
 あせ



上田 十五間 一段一石四斗



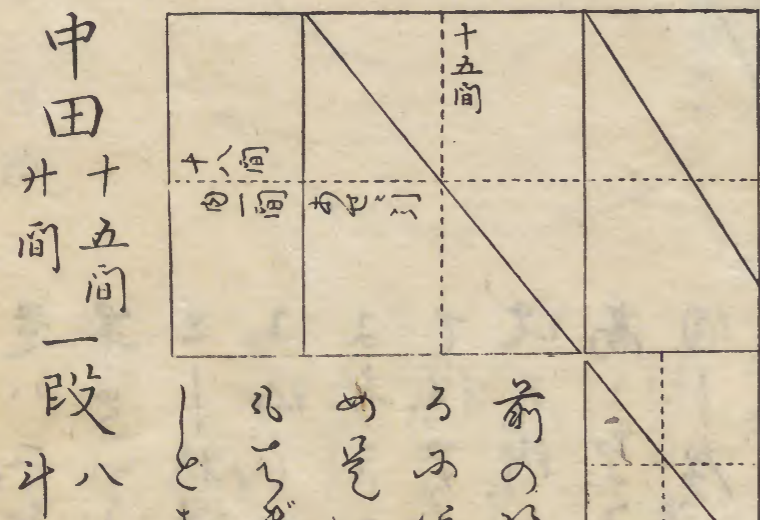
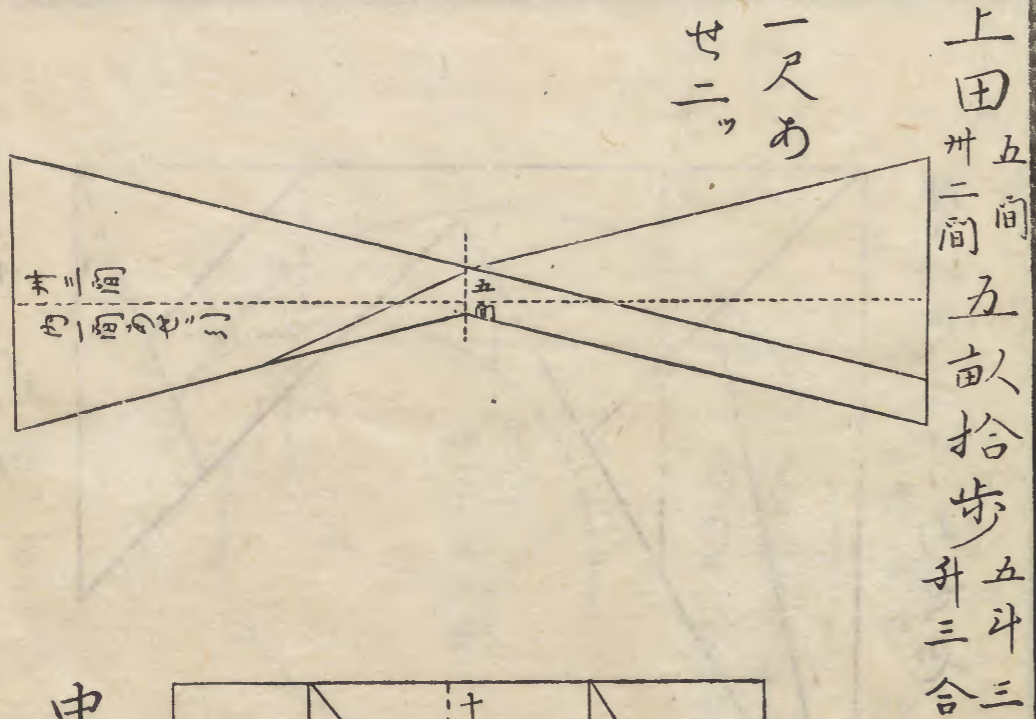
中田 十五間 一段一石二斗



此石附くま  
 又高とあせ

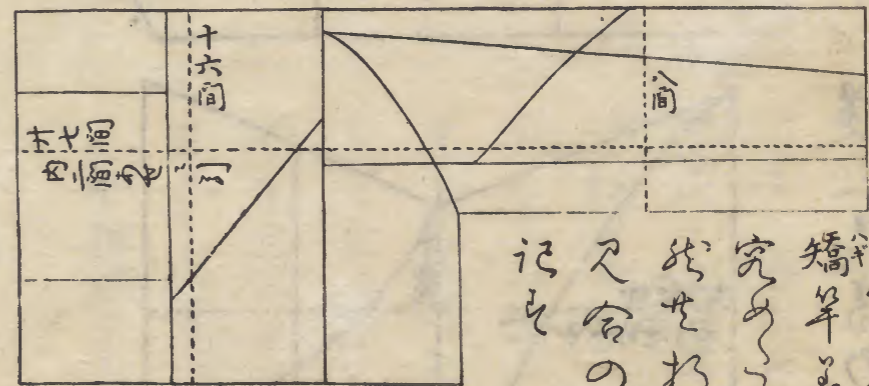
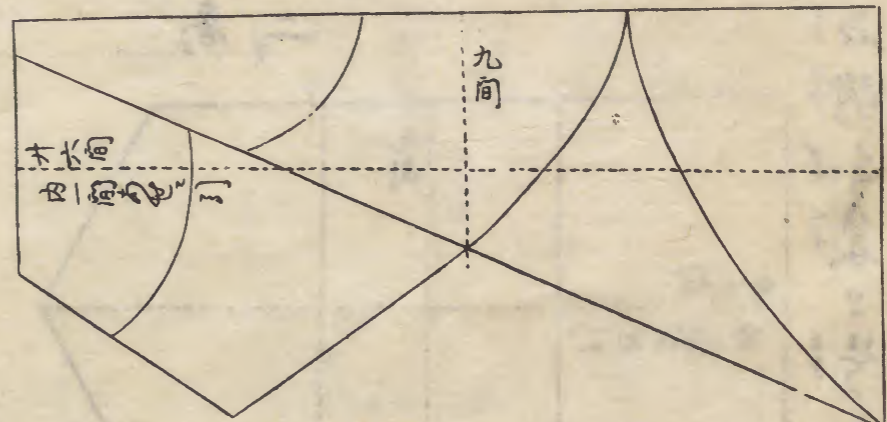
横三尺高あせ二  
 おハ一尺あせ也

八寸あせ  
 一ッあり

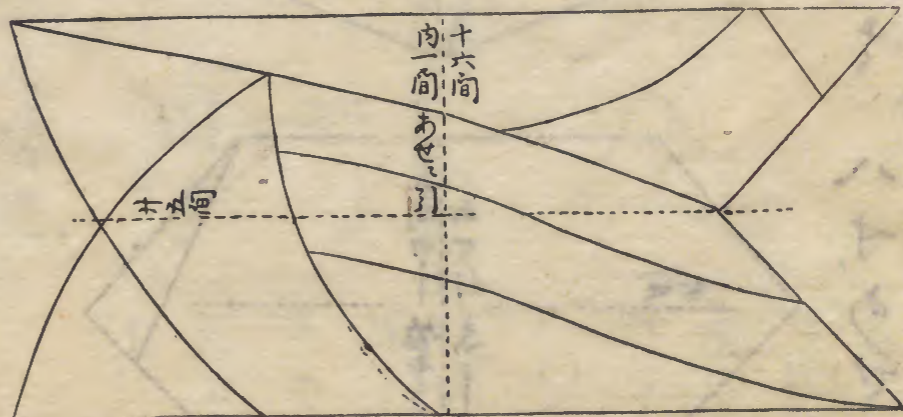


此出さき 緩間よりくや

前の竿より八次竿とあ  
るお縁て見合をのた  
め是と記と如是なる  
るこちが竿より完る縁よ  
しと記さき

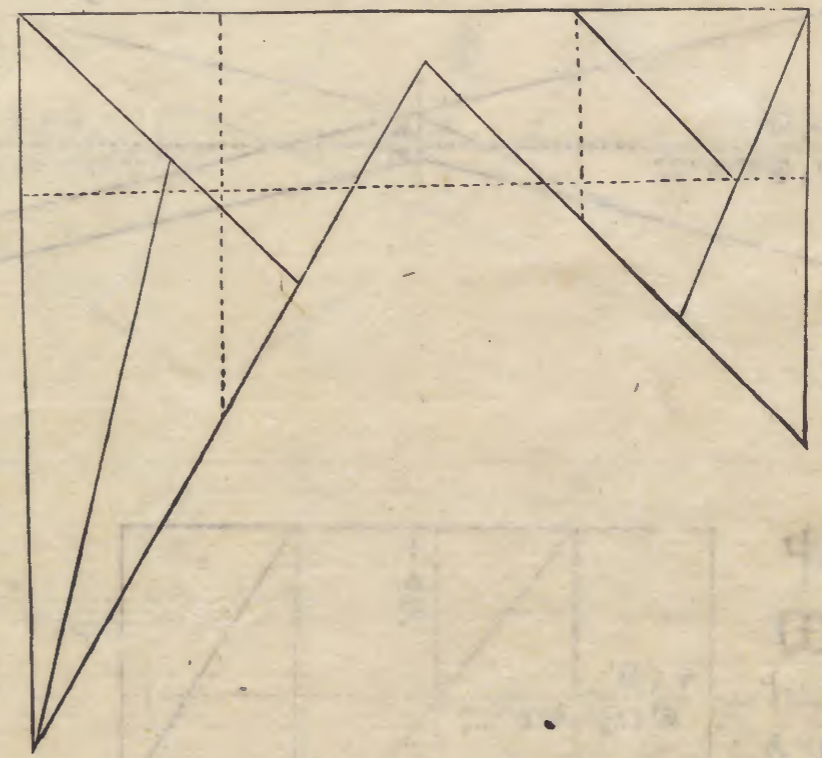


此の形ハ  
矯竿と  
完るる  
然るに竿  
尺合のた  
記と



皆一尺二寸あせ也

下田 十二間 一段 一石

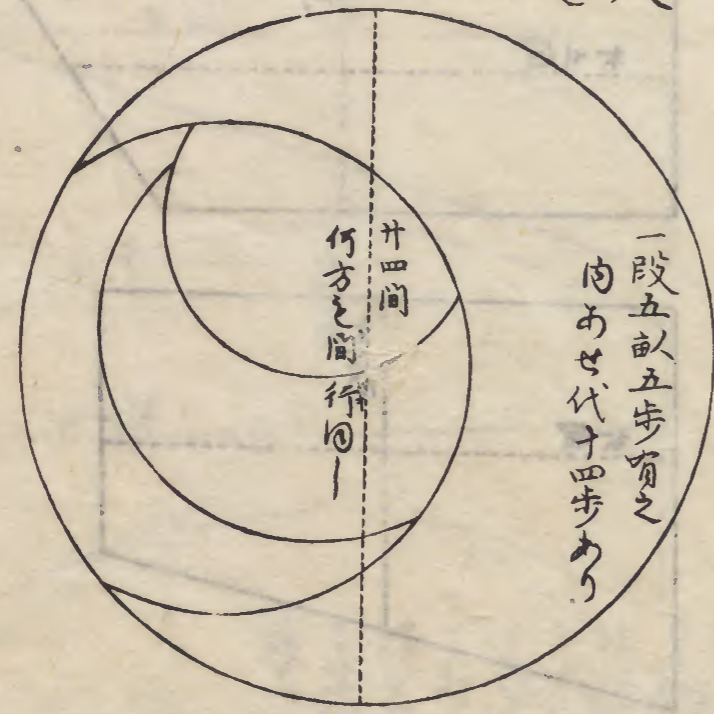


皆一尺二寸あせ也

是ハ二ツりの折半也折  
半と云ふ事記さるが  
ヨリ折半違ふ事ある  
ヨ依て如此あるハ二  
ノ折半あれバ二ツり  
て総里する事ありし  
は石附分来と号し又  
高と云ふ也上村中村同  
同ノ度と云ふ中村高下  
ふちと云ふの事下  
下村の田も準之

下田 廿一間 一段 四畝 廿一步 八斗 八合  
外十四歩あせ除く

皆一尺あせ也

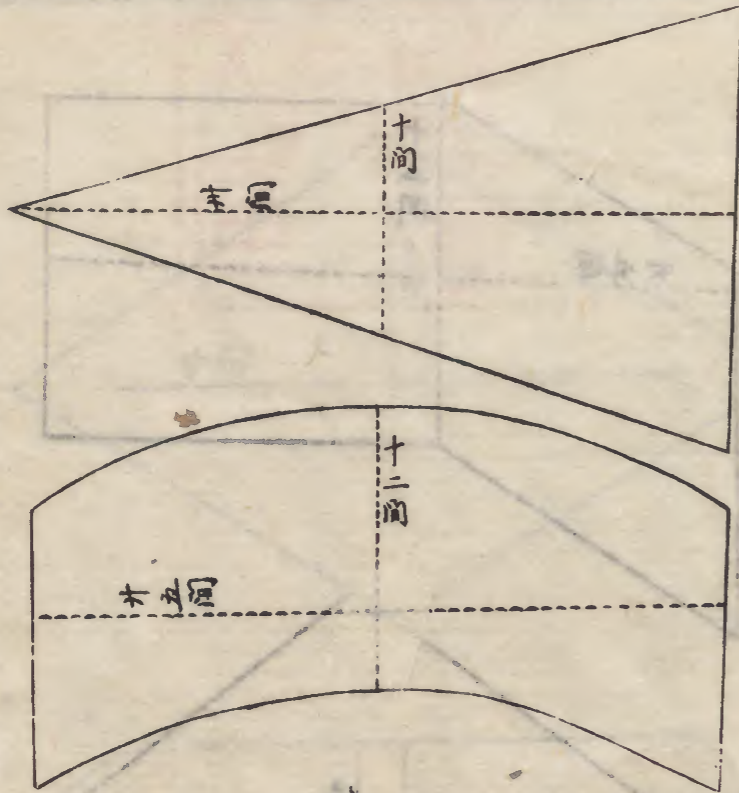


一段五畝五歩有之  
内あせ代十四歩あり

上村畠檢地 上畠一反一石二斗賦  
中畠一反一石賦  
下畠一反八斗賦

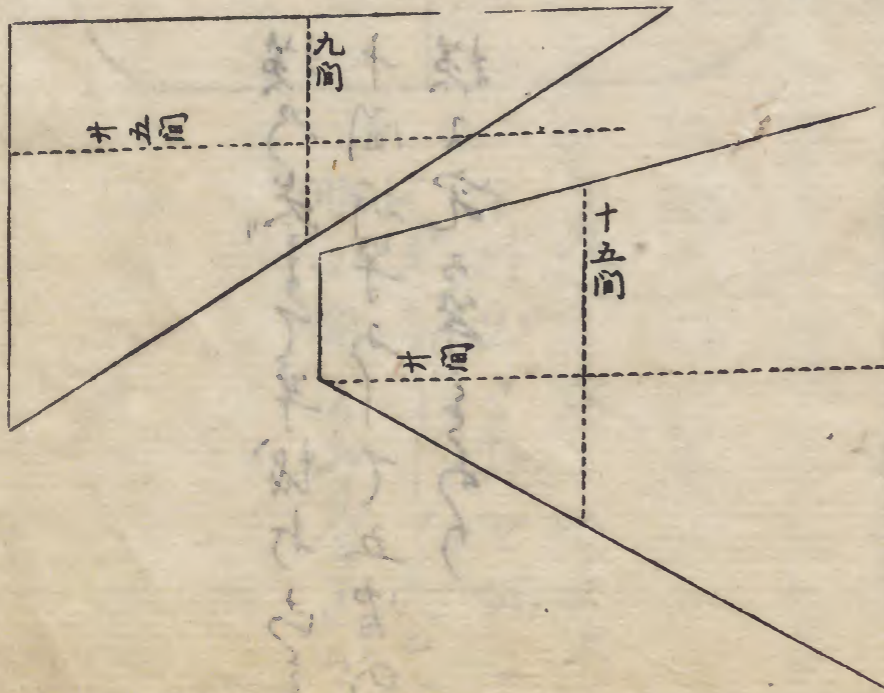
ウヤウなるハあせと引  
除き却に案しきたてよ  
こ此一畝ノ宛る也是ハ  
算法と云ふ宛る半也  
此も手に残して此も  
なる事ハハあせ又  
ウヤウなる事あり

下畠 十二間 一段 斗六



所よ  
至繼  
地の形  
よ中と  
まらう  
ておく  
横と宛  
る等と  
りり

上畠 九間 七畝拾五歩 斗六

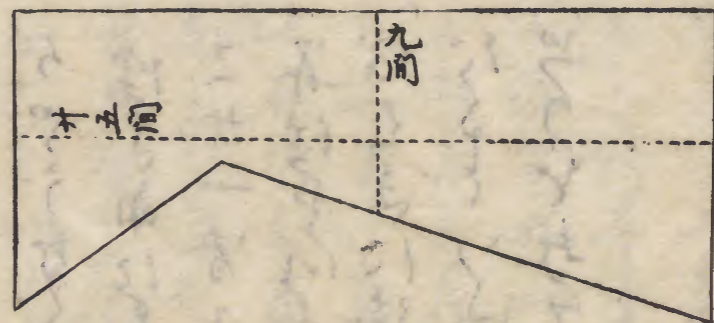
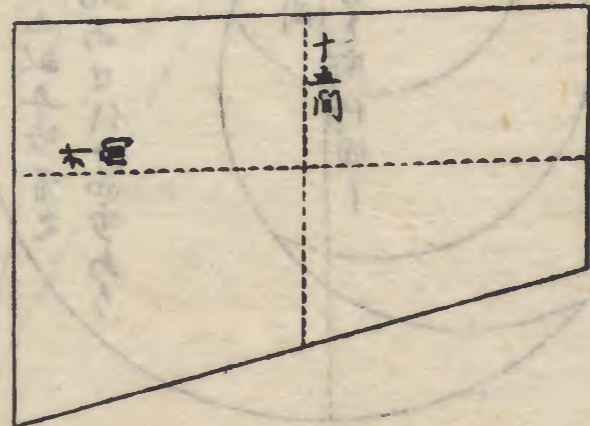
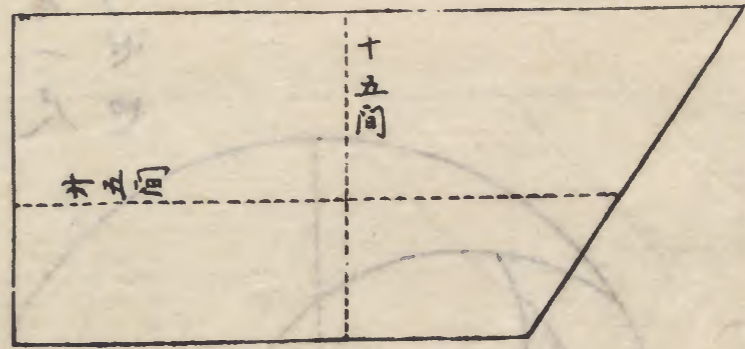


中畠 十間 一段 斗八

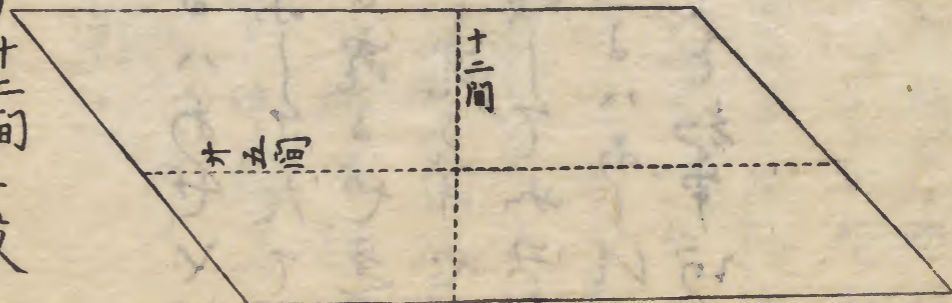
中畠 十五間 一段 斗六

上畠 十五間 一段 二畝拾五歩 一石 斗五

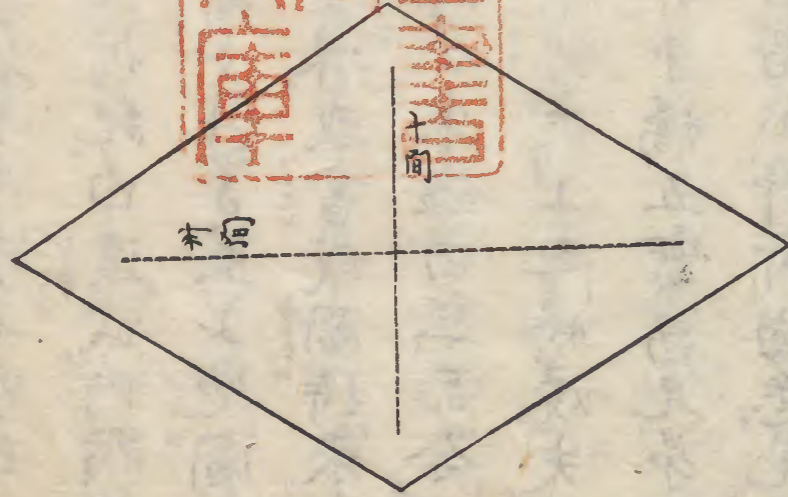
下畠 九間 七畝拾五歩 斗六



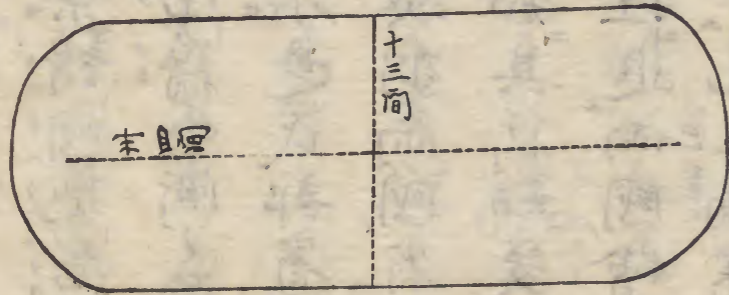
上畠 十二間 一段 一石



中畠 十五間 一段 一石



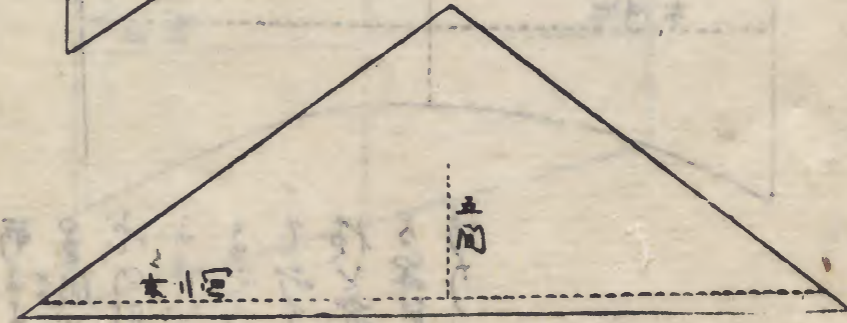
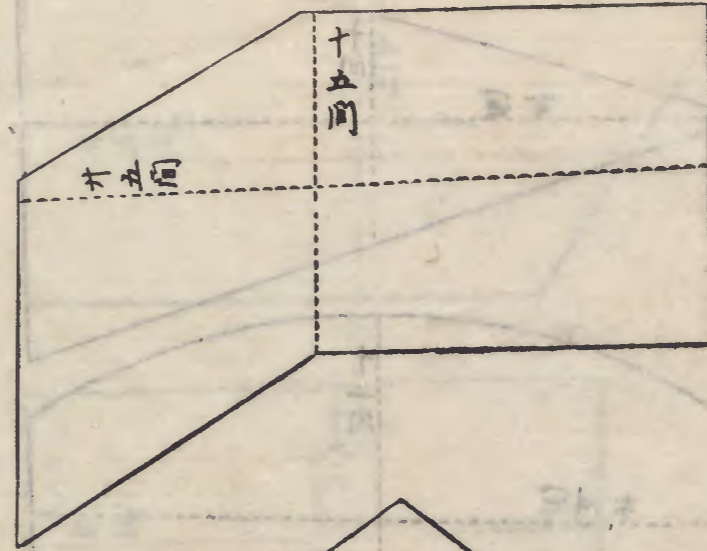
中畠 十間一段 斗五



下畠 十三間一段 四斗四

り屋うあるはまる  
えれ出さたと偶ふ  
たが角よりてたこ  
卅四間よりおるさり

下畠 十五間一段 二畝拾五歩 斗五



上畠 五間五畝拾歩 三斗七

横乃尖まて等城おる  
十間折等ありて五畝の  
横より究る等あり







と擬して畝町よりき何れぞと究る也○門割地といふは一村の門を盡きわけて百姓より親疎ありたる田と校割ともいふと云ふは田を元より所を年経て下田を裏里又下田を上田となりて高結物成の輕重等かゝる由を中量の半と入て田地を割配各税則と平とを敷とす酷吏をゆるぎい丈出とて公の益たるといふは反て私の培免とて百姓を傷ふものなり政刑大觀云自丈量至今已逾百餘年桑滄更易攤沒無算是之しく門割ありは田畑の入乱らるるといふ○或謂地化ハ百姓窮も次田税も第一とて農史ハ兵税

則の地といふは事とありとの由を地化の究やるといふ志望の違不様とらるる流やげ村中絶と失ひ動とらるるかめりみはり是事と執りの必當とて併登りて次方法とて知志に登りて次通鑑宋紀云及其既種有司履畝増之故民皆疑懼と履畝ハ歩法とて畝段と究るものとあり○凡上村の百姓下村へ引移して上村の田と依ると以上村より出依るといふ下村より入依るといふ凡そ村名の者よりわたりて地より事りてその田地と依るといふ入依るといふあり○祖の代に何百石ありてを子孫よりわたり來りて遷りての後檢地入るる時水陸の無形此の在と肩書





役顯宗紀福

徭持統紀○通證

人夫貞觀儀式○天武紀於保多如良

と割レ今夫

夫足室町

夫凡人足

役丁晉書○河拍齋集云民財空虛弊議仰惟國朝使民之法祇候弓兵皂隸門禁厨斗之類無所不役固已多矣但國初法令嚴明編食有數故民力未至甚勞近年以來則常役之外雜派夫役紛々而出如所柴夫檣柴夫修河夫修倉夫運料夫接遊夫治夫舖夫開夫浚夫之類因事編食蓋有不

可勝數者矣此他レ修レ瀾夫修レ隈レ公役荀徭役周禮○

夫塘長の名明會典レ出レ野役同上若起野役遂

作田役同上太宰之職以八則野役同上若起野役遂

民至千遂之連丁仕學運夫夢溪人夫荒政要覽

大旗之下運丁仕學運夫夢溪人夫荒政要覽

蕃名アーンデーリングデルホルツ夫使民以時時以作事事以厚生不違農時為民の農

隙と時あふて公役と課さるる皇極紀大兄王曰願

十年不役百姓以一身之故豈可煩勞万民哉孝德紀曰於

農月不合使民又曰凡仕丁者每五十戸一人以充諸司續

紀寶字元年詔曰自今以後宜以十八為中男子二十以上

成正丁按書言故事註唐制男子二十一歲差丁役隋文帝

又唐書授田十畝歲輸粟二斛謂租丁物部氏曰蓋男子二

八而精通有為人父之道當是時士大夫之子志為士大夫

農工商之子志為農工商其無志者亦衆矣如昭公十九

有童心是也三十而受室受田始稱一夫前是則餘夫也

賦役令曰凡正丁歲役十日若須收庸者布二丈六尺一日

二尺六寸須留使者謂正役之外滿三十日租調俱免役日

少者計見役日折免通正役並不得過四十日次丁二人同

一正丁其丁起役之日長官親自點檢并閱衣糧周備然後  
 發遣若欲雇當國郡人及遣家人代役者聽之代役ハ即今  
 の名代役と云ふがごとく申比より諸國と云ふごとく  
 是を亦代役と云ふ和訓葉よりけめんハ保人あり未信  
 徧取保とあるハさげと云ふより民部式曰凡人  
 生五男成正丁免父課役雖一人闕猶免除凡式は諸國  
 毎正税の外修理料池溝料及堰河坊料と云ふものハ  
 一切は田地用水の川溝墾塘等々の修葺雜費及夫飯  
 米は支給儲の爲に差ふと云ふより聖武紀は遠江國  
 荒玉河堤決三百餘丈役單功三十萬三千七百餘人元糧

修築と云ふことありじり隋煬帝建洛邑毎月役丁二  
 百萬人丁男不元以婦女元役と云ふ文獻通考より云ふ  
 臨時の大修理と云ふてハ是れとの夫役ハ最稀と云ふ  
 通證曰後土帝明應八年九月遠江洪水湖決して水涸  
 成陸今名今切者其決處也歷代備考曰後柏原帝永正  
 七年八月廿七日遠州今切洪水高浪して濱名驛橋共  
 海中に轉没と云ふ山津波にて宝螺のあつと云ふ事  
 ありと云ふ聖武の御宇既又漫吹切と云ふ事ハ今教千人の  
 役丁と云ふて田地等の繕修と云ふハたやと云ふめり  
 里凡人夫と集れハ夜四更よりと云ふくの官所は燎火と  
 焚て味爽よりハとや櫛載と取入敷と探出と云ふ諸の場  
 小お出て各々ともと云ふ令次是管監人ハ夙より夜より力と

蜀一煩と志とてしつとつよふも意とて功の後とて  
一月と志とてしつとつよふも意とて功の後とて  
用の日ハ後の世もどとつとつよふも意とて功の後とて  
元陽威夏芒履立福田中須役者退而後就舍故其田歳  
無不稔軍中足食とて人足とて出ハ大  
勢の集るも志とてしつとつよふも意とて功の後とて  
頃来りて村よりハ倉造とてくまバ一日とて後とて  
と三四日わつり人足は決る費ゆり各組合の村役人談合  
し請負と附人とて人足は決る費ゆり各組合の村役人談合

とて請負つ後とて水引方等法を決りて何り昔ハ  
役とて一領村とて力と持て川除道橋揚各揚引の役  
勤るも志とてしつとつよふも意とて功の後とて  
然るる組合ハ決る費ゆり各組合の村役人談合  
とて請負つ後とて水引方等法を決りて何り昔ハ  
引るも志とてしつとつよふも意とて功の後とて  
村ハ平均とてしつとつよふも意とて功の後とて  
ハ魚の村ハ下村とてしつとつよふも意とて功の後とて  
ハ是とてしつとつよふも意とて功の後とて  
のつとてしつとつよふも意とて功の後とて



うは村役人と婦人は是れと不精なる者なり又是れは  
不坊なりはまゝに名主の害を福元より人足五人と  
解済ハ三人と出一定は得と欠て村方へ働やする人  
とれども定ハ我所持のものと引田地なく己うあるは  
さほゆえ何てもめて福元人足又ハ諸色方違せて村  
村事とちりまゝに組頭は味とる○夫春ハ耕と  
僅一畝ハ之のりも收り且ハ之と通一川と海へ又ハ海  
江と防ぎ山野と兵き塔と修め陵と平ふと子のとど敷  
何ふりありあまハ凡ハ席上の軍議とおふくも場  
就て功と政方の実像と踐がれば空論たる○前

諸事<sup>シヨ</sup>貞<sup>シ</sup>とくは田<sup>タ</sup>地<sup>チ</sup>川<sup>カハ</sup>濬<sup>ジュ</sup>土<sup>ツ</sup>木<sup>ボク</sup>運<sup>ウン</sup>輸<sup>シュ</sup>等<sup>トウ</sup>は  
て助<sup>テ</sup>役<sup>ツク</sup>修<sup>シユ</sup>管<sup>カン</sup>とて官<sup>カン</sup>に金<sup>カネ</sup>を納<sup>ノウ</sup>て官<sup>カン</sup>に金<sup>カネ</sup>を以<sup>モ</sup>て支<sup>シ</sup>用<sup>ヨウ</sup>を償<sup>ツク</sup>  
あり又高<sup>アキ</sup>賈<sup>ド</sup>の徒<sup>ト</sup>官<sup>カン</sup>に請<sup>ヒ</sup>て金<sup>カネ</sup>と百姓<sup>ヒョウシヤウ</sup>より募<sup>ツク</sup>出<sup>デ</sup>さし己  
の「まゝして事<sup>コト</sup>を包<sup>カキ</sup>辨<sup>ヒキ</sup>あり共<sup>トモ</sup>に中<sup>ナカ</sup>より取<sup>トル</sup>  
利<sup>リ</sup>と射<sup>シ</sup>の計<sup>ケイ</sup>とまはして後<sup>ノチ</sup>世<sup>セ</sup>多くは冤<sup>ウヰ</sup>屈<sup>クツ</sup>と被<sup>ヒ</sup>る少<sup>シ</sup>か  
らば大學<sup>ダイガク</sup>衍<sup>エン</sup>義<sup>ギ</sup>補<sup>ホ</sup>は樸<sup>ハク</sup>買<sup>バイ</sup>者<sup>シャ</sup>通<sup>ツウ</sup>計<sup>ケイ</sup>坊<sup>ホク</sup>勢<sup>セイ</sup>該<sup>ケ</sup>得<sup>トク</sup>税<sup>ゼ</sup>錢<sup>セン</sup>總<sup>ソウ</sup>數<sup>スウ</sup>俾<sup>ヒ</sup>高<sup>カウ</sup>  
先<sup>マ</sup>出<sup>デ</sup>錢<sup>セン</sup>与<sup>ヨ</sup>官<sup>カン</sup>買<sup>バイ</sup>之<sup>シ</sup>然<sup>シテ</sup>後<sup>ノチ</sup>聽<sup>キ</sup>其<sup>ノ</sup>自<sup>ジ</sup>行<sup>コウ</sup>收<sup>シユ</sup>稅<sup>メ</sup>以<sup>テ</sup>為<sup>シ</sup>償<sup>ツク</sup>也<sup>ナリ</sup>元<sup>ゲン</sup>初<sup>ショ</sup>有<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>  
銀<sup>ギン</sup>五<sup>イ</sup>十<sup>シユ</sup>万<sup>マン</sup>兩<sup>リヤウ</sup>樸<sup>ハク</sup>買<sup>バイ</sup>天<sup>テン</sup>下<sup>カ</sup>差<sup>サ</sup>發<sup>ハツ</sup>者<sup>シャ</sup>有<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>銀<sup>ギン</sup>五<sup>イ</sup>万<sup>マン</sup>兩<sup>リヤウ</sup>樸<sup>ハク</sup>買<sup>バイ</sup>燕<sup>エン</sup>京<sup>キヤウ</sup>酒<sup>シユ</sup>  
課<sup>カ</sup>者<sup>シャ</sup>有<sup>リ</sup>以<sup>テ</sup>銀<sup>ギン</sup>一<sup>イツ</sup>百<sup>ヒャク</sup>万<sup>マン</sup>兩<sup>リヤウ</sup>樸<sup>ハク</sup>買<sup>バイ</sup>天<sup>テン</sup>下<sup>カ</sup>河<sup>カ</sup>泊<sup>ハク</sup>橋<sup>キョウ</sup>梁<sup>リヤウ</sup>渡<sup>ダ</sup>口<sup>コウ</sup>者<sup>シャ</sup>耶<sup>ヤ</sup>律<sup>リツ</sup>楚<sup>ソ</sup>  
材<sup>サイ</sup>云<sup>ク</sup>此<sup>コト</sup>是<sup>シ</sup>姦<sup>ケン</sup>人<sup>ニン</sup>欺<sup>キ</sup>上<sup>シヤウ</sup>罔<sup>コト</sup>下<sup>カ</sup>為<sup>シ</sup>害<sup>ガイ</sup>甚<sup>シ</sup>大<sup>ダイ</sup>咸<sup>ケン</sup>奏<sup>ソウ</sup>罷<sup>ヒ</sup>之<sup>シ</sup>樸<sup>ハク</sup>買<sup>バイ</sup>ハ此<sup>コト</sup>云<sup>ク</sup>

清負取の事あり○農民の難為亡命の堪がはるものハ戸  
徭錢カ丁役より甚くはハチー又従て轎夫馬夫も充ら  
はハのハ肩の骨と傷馬ハ脚の蹄と刃も玉くざら  
ハハハ劉陶鑄錢議云夫欲民殷財阜要在止役凡百姓ハ  
耕作と勤んとおりへども役多くとてハ耕ハ芋の暇  
なくんば播種の時も元はと流きんらど交のりも  
阿まきがハる阿が阿も種さめさハ必はハ風まどりの時  
も遇て不納の年うらよ及も阿り風雨の事ハ天氣の志  
もぞられハ人力のいんともまはるをさあハ阿ハ人  
省ハも風雨のむねきたハ新めを阿てハ獲収いどさハ

とあり周公且詩追天之未陰雨徹彼桑土綢繆牖戸とい  
ふとまいて用んやまといふことなり丁夫と指使ふと  
の常ハ懈弛は愈々又百姓の困憊と云ハ僅ハ十  
二月より正月までの中をうら固て年中の胃少の違阿  
らハ晝とハ夜と暮き索と綯ハ席と織ハ苞と編ハ  
農具と繕ハ家事と務ハ一但ハ國の百姓ハ冬より春  
よままで氷雪ハ封ハさくさあゆの業と勤めり程子云  
古者功任之事皆於冬月間隙之際如修完室廬墻垣之類  
皆為来年計皆是一歳之事既終則慮其始也怒して畦溝  
塘隄よむてハ犁擺種下秧挿又ハ草木と刈伐肥養と封



いふことより後平記は當將軍義政卿の御代と  
ありて一年深役算は厚大嘗會とありし十一月九  
度時と掛らるる同十二月八度及び一ヶ月の  
民饑死と著る郡鄙一般は徳政の敷訴と企くるも  
武家より借金と商人の借債に既して終つて及  
ば息足と免されて今迄及て二十三年まで徳政  
と行ひ進みあはるは貧人商人の樂と同せざれば  
より富者一錢とん多と助るるも少く似僅はいつ  
緒てらるる應仁紀は麻花院義満の御代は倉方四半にか  
りりし普應院教義の御代とありて倉役の時時志づく

りしうば借債と破んとて前代未だ徳政とありしと  
出しく此時代はサシ度まで進みれば倉方と地下と  
皆絶果て天下は只破るは破るは世帯は減ホロ減ホロと  
え宝町日記天文十六年義輝御領百姓の訴状は夫是止去  
となく勤まらる依て十ヶ年とあるの三ヶ一とてハ叶  
いごととあり讀史後論は倉役とらいつるは富高富民  
よりめけて結かりあはるるごとくかく國用乃不足と  
るるハ皆是上一人の驕奢によるる其流弊下民は悔  
て怨若せし所の禍終はまこと一人は歸するものやと  
り又東鑑は段別の錢公田十町は付後若干とあると

凡之儀久記に國くに守護と云き郡郷と地頭とを一段  
別兵糧と充取る者領家ハ地頭と云ぬ地以ハ領家と  
あつと建武記曰町別錢貸人夫傳馬事稱先例被懸百  
姓之條不可然向後以撫民之儀可為領主之所役應仁記  
ハ一段別棟別と色々の様とあつて遺責とれハ必々の  
名主百姓ハ耕作と志地と田畠と捨てて食一足と任  
てとてくつとありじりより出浪出取ハ百姓の羅極  
しとてくつとのおとく一或書ハ百姓の出浪ハ大抵田一段  
ハ金子二分或二分二銖ふとの租と通例と云ふは  
あつたりふと大莊頭と云ふ出浪と云ふとありとつり

夫農の物本と云ふハ米穀と云ふ是と米牙ハ零粟と  
るハ豊年の時ハ米價賤して又凶歲ハ米直騰貴と  
つと市ハ鬻と云ふの粟顆と云ふ是農の常と云ふと  
事と云ふと云ふハ民の課役免きと云ふと云ふハ  
の恒係とて申不就 仁徳天皇浪華高津宮ハ都玉  
ハ浪連上古圖説曰高津宮の舊址 登高臺遠く眺望と  
ハ今の東高津村高原の地なり 小乃詔曰烟氣不起於域中以為百姓既貧而家無炊者封  
畿之内尚有不給者況乎畿外諸國耶自今之後至于三載  
悉除課役息百姓之苦自是日始黼衣鞋履不弊盡不更為  
也過飯煖羹不酸餒不復易也三稔之後諸國悉請曰課役

並免既經三年貢稅調以修理宮室然猶忍之不聽矣十年  
甫科課役以構造宮室於是百姓不令而扶老攜幼運材負  
簣未經幾時而宮室悉成故於今稱聖帝竟宴和歌集天慶  
六年 仁德天皇と詠む心師輔の歌 大鷦鷯天皇がよ  
りし山煙天のいつぎとよえはさるる共三年ハ尚有る  
一十年課役と免されしとて豈奪じしとての謂ふらん  
や皇帝の聖とる所以とるふら七錄齋集賦役論云以版  
籍天下之甲兵以墾田定天下之賦稅國家之定制也而因  
時通變之道亦存其中唐之租庸調租出於田調出於家庸  
出於身令不煩而易守而又有役二十五日役三十日之所

免水旱蟲蝗十損四十損六十損七以上之所免則周官均  
節之遺也然兵興以後籍亡而征重其勢不得不從於地斷  
此揚炎之故租庸調為兩稅與張說之改府兵為彍騎未可  
同日而論也 中夫宋乾道之時汪灌一松陽之民首倡義役  
從先後視籍兩多寡視等行之三十年訟不抵於有司而謂  
大夫師長不能叙建規模成循理之鄉信義之里亦天下之  
所不信也 故仲尼不對季孫之問田賦漢高怒責蕭何之  
治未央萬世之計皆慮之於微而究之春秋所書宣公之稅  
畝成公之丘甲哀公之田賦惡其大變古而亟思復者惟在  
周公之典則今之所謂周公之典者何為乎郊祀之戶籍薦



